

史料として見たる初期の外字新聞

蛭原八郎

發生期に於ける我國の外字新聞の歴史が、幾分でも明かにされたのは、つひ近年のことで、それまでは外字新聞のことなど、まるで人々から問題にされてゐなかつた。それは一つには、實物が殆んど何處にも保存されてゐなかつたからでもあらうが、要は、明治文化の研究方法が、未だ全く組織化されてゐなかつた爲に、隨つて外字新聞の史料的价值といふものが一般に少しも認められてゐなかつた故である。併し近年は、明治文化の研究熱が熾んになるにつれて、自然に當時の實物も思ひがけぬやうなところからぼつ／＼と出てくるし、又、小野秀雄氏や花園兼定氏等の不斷の努力によつて、其當時の外字新聞の事情も稍知ることが出来るやうになつたので、茲に私は、其驥尾に附し乍ら同じ道を究めつゝある一人として、初期の外字新聞の史料的价值に就いて、聊か愚見を述べてみたいと思ふ。

大體我國に於ける初期の外字新聞は、以下に述べるが如く、それ自身内容的に尠からぬ史料的价值を有してゐる以外に、邦字新聞の發生變遷等に對しても、それを外部から刺戟誘導した點に於て、又非常な貢獻を爲したものである。其事は、最初の外字新聞「Nagasaki Shipping List and Advertiser」の創刊年月が、邦字新聞の鼻祖と謂はれてゐる文久二年正月創刊の「バタバヤ新聞」に先立つこと半年の、文久元年（一八六一年）六月二十二日であつたことを思ふだけでも容易に窺ひ知れるであらうし、又當時横濱で發行された種々の外字新聞を、會譯社の學者達が翻譯筆寫した所謂筆寫新聞や、外人の宣教師とか商人達が自らそれらの外報などを翻譯せしめて板行した數種の邦字新聞類も、其一例として考へることが出来るであらう。

其頃、我國に行はれた外字（と云つても、無論此場合は英字に限られてゐるが）新聞には、上掲の「Nagasaki Shipping List and Advertiser」が、發行者の英人 A. W. Hansard の都合で、同年十一月に長崎から江戸に移つて其月の二十三日に創刊した「Japan Herald」や、同じ頃米人 Schoyer が創刊した「Japan Express」や、文久三年五月に葡

人 F. da Rosa が創刊した "Japan Commercial News" や、同紙を慶應元年九月に英人 C. Rickerby が買収して改題創刊した "Japan Times" や、慶應三年十月十二日に英人 T. B. Back が創刊した "Japan Gazette" 等々がある。以上は長崎の最初の二つ以外はすべて横濱で発行したものとみであるが、此外にまだ、神戸には慶應三年十二月十日に英人 A. F. Watkins が創刊した "Hiogo and Osaka Herald" や、慶應四年（明治元年）四月二十三日に葡人 F. Braga が創刊した "Hiogo News" の二種があり、長崎には月日は未詳であるが其頃英人 F. Walsh が創刊した "Nagasaki Times" などがあつた。而して明治以後に至つては、此種の外字新聞は實に枚舉に遑ないほどある。

當時これらの外字新聞中に在つて、最も興望を負つてゐた外人記者は、「ジャパン・ヘラルド」や「ジャパン・ガゼット」の記者發行者として、又其遺書 "Young Japan" (1883) の著者として有名なジョン・レッツレイ・ブラックである。彼は此外にも、明治三年五月三十日には隔週英字雜誌 "Far East" を、明治五年三月十七日には邦字日刊新聞「日新真事誌」を、それ／＼創刊した我國新聞文化の大恩人であるが、そのブラックの言として、明治四十二年に横濱のジャパン・ガゼット社で編輯發行した "Yokohama Semioentania" 中に次の一節が引いてある。(原英文)

「讀者諸君は此時（慶應元年）以來、日本人の新聞に對する見解が急速に進歩した事實に一驚を喫するであらう。其事で最初に私を驚かしたのは、日本の或青年紳士の訪問を受けて外字新聞の勢力が日本の政府筋にまで多大の影響を及ぼしてゐるといふ事實を知つた時のことである。其青年は或外國語の學校を卒業して、同窓と共に洋式の軍事教練を受けてゐる者であつた。彼は先づ非常に鄭重な態度で豫め私に失禮を詫び、自分の訪問を決して口外しないやうにと懇請した。彼が私を訪問したのはお上（原註、彼の藩であらう。）の御用であつた。其用件といふのは、先年佛蘭西に派遣された使節が、不成功を責められて前年の八月中江戸に監禁されて居つたが、その事件が未だ落

著せずごた／＼してゐるので、私の新聞紙上に彼等は當然許さるべきであるといふことを書いてくれといふのであつた。私は其處でそれを快く承諾し、又彼の訪問も極秘にすることを吳々も約束して別れた。で、次の土曜日（慶應元年、西暦一千八百六十五年六月二十四日）の論説欄に私はその約束を果したが、それに就て私は別に何等の結果をも期待しなかつた。若し私の記憶にして間違ひがなければ、その論説といふのは、僅か原稿紙六枚ばかりのものであつた。ところが、それを發表してからどれ位後のことだつたかは判然と憶へてゐないが、或日意外にも右の青年紳士が再び私を訪問して、私の論説が大變旨く行つたことを心から感謝したではないか。きつと斯ういふ事件には、外字新聞の論説が一番手つ取り早くて良い證據となつたのであらう。このことは、當時の日本人が如何に外字新聞から影響をうけたかといふことを實證する好箇の一例である。」

右文中、「先年佛蘭西に派遣された使節」とあるのは、文久三年の遣歐使節池田筑後守、河津伊豆守、河田相模守等のことで、其事實は成程右の記述とすつかり符合する。

又、有名な Sir Ernest Mason Satow の著 "A Diplomat in Japan" (1921) にも左の一節がある。(吉野作造博士の譯文引用)

「ある時私はジャバン・タイムスのチャールズ・リツカアビーと數日と一緒に過した。そこで彼と懇意になつた所から私は彼れの紙上に私の不慣のペンを振ふことを約した。最初の試みは日本内地の旅行に關するものであつたが、間もなく不圖したことから政治論をも試みる氣になつた。私の寄稿が不規則で拙くて常則に外れたものであつたことは言ふまでもない。併しそんなことは頓と念頭に置かなかつた。

そこへ薩摩の一商船が灣内に這入つて來た。官憲ははるか神奈川寄りに投錨すべく命じた。外國人と船の人と直

接交渉する勿らしめんが爲めである。之を私は主題として、大君との間に締結された條約の不備を大に評論したのであつた。それは該條約は我々の交易を彼れの本領の住民に限り、日本大半の住民とは全々我々を遮斷するものであつたからである。そこで私は條約の改正を主張した。同時にまた日本の政治組織改革をも説いたのであつた。私の提案は斯うである。大君は一藩主としての當然の地位に退くべきこと、而して諸大名はミカドを頭領として合議體を作り、それが事實上の支配者として大君に代るべきこと、即ち是れ、而して之と共に私は現行條約の改善並に修正に關して種々の意見をも述べたのであつた。云々。」

右の論説は當時既に非常な反響のあつたものであるが、サトウは其後之を和譯して、英國人サトウ述『英國策論』と題して出版した。此書物の内容は、大正五年四月發行の「新舊時代」に原文の儘翻刻してあるから、それを参照ありたい。

是等は、明治以前に於ける我國外字新聞の勢力、つまり存在價値を、史料的に裏書きしたものであるが、此事は明治以後の外字新聞に就ても、大體同じやうなことが云へると思ふ。早い話が、明治文化は外人文化であると云へ云はれてゐるほどであるから、當時在留の外人が其機關紙としてゐたところの外字新聞を無視しては、到底明治文化を完全に理解することなど出来ぬ筈である。當時の外人達が、日本及日本人を如何に觀察しつゝあつたか、このことだけに就ても、文化史研究者は當時の外字新聞を研究することに據つて、大に益するところがあるものと信ずる。

又單にニュースとしての點だけから見ても、當時我國の邦字新聞紙は、新聞條例といふ痛い筆枷を嵌められてゐて手も足も出なかつたのに反して、外人經營の外字新聞は、例の治外法權で何でも勝手なことが云へたので、王政復古を始めとして、廢藩置縣、臺灣征伐、西南役、琉球問題、朝鮮事件、條約改正運動、日清戰爭、其他數ある國內事件

外交問題等の場合、偽りなき報道や赤裸々な彼等の意見を、私達は其紙上に容易く見ることが出来るのである。而も彼等の記事は、邦字新聞のそれに比して、遙かに科學的數理的である。であるから、其頃の外字新聞の記事は、小野秀雄氏の所謂内容的價值と形式的價值とを、二つ乍ら兼備してゐる場合が多い。一々實例を擧げて具體的に之を説明すれば面白いのだが、今は紙面の都合上それも出来ぬから、たゞ、當時の邦字新聞が如何に汲々として日々外字新聞の記事を翻譯することに努めたかといふことを、大體想像していただくだけにとどめやう。因みにいふ、小野氏の所謂内容的價值とは、其記事のニュースとしての内容事實が果して史的真相を傳へてゐるかどうかを意味したものであつて、氏は、此點では新聞記事は其性質上餘り信頼出来るものではないといふことを示された。そして第二の形式的價值とは、其記事の内容の眞否如何を別として、單に其記事面によつて演繹的に或は歸納的に、各其時代相を觀察すべき場合に於ける素材的資料としての價值を意味するものであつて、此方面では新聞記事は最も有要なものであると力説されたのであつた。

私の友人の一人は、外字新聞の廣告面を、年鑑類ディレクトリの代用みたいな意味で、いろ／＼と現に利用してゐるが、それも一段であらう。上記の「ジャパン・ヘラルド」や「ジャパン・コンマーシヤル・ニュース」などは、文久三年頃、週刊の合間の繋ぎとして、殆んど廣告専門の日刊新聞を無料配布してゐたが、成程今これだけを通讀してみても、當時の外人達の生活内情が如實に窺はれて、非常に興味が深い。

最後に、明治初年に於ける代表的な外字新聞の名を左に列擧して、此稿を結ぶことにしやう。

先づ横濱の三大英字新聞としては、上記の「ジャパン・ヘラルド」と「ジャパン・ガゼット」の他に、明治三年に英人 Howell が創刊した「Japan Mail」がある。此「ジャパン・メール」は、他の抗官的な諸新聞とは反對に、日本政府

の御用新聞として有名であつた。英字新聞以外では、横濱で明治三年に佛人 C. Lewis が創刊した "Echo du Japon" といふ有力な佛字新聞がある。

東京では、明治十年一月六日に米人 H. H. House が創刊した "Tokio Times" がある。

神戸では、上記「ビョーゴ・ニュース」が長いこと獨り天下であつたが、明治二十二年四月二十九日より英人 A. W. Curtis が "Kobe Herald" を創刊し、翌々二十四年には米人 R. Young が "Kobe Chronicle" を創刊した。後者は今の "Japan Chronicle" の前身である。

長崎では、上記「ビョーゴ・ニュース」の發行者であつた葡人フィロメノ・ブラガが明治三年一月に創刊した "Asahi Express" がある。此新聞は後年 "Rising Sun and Express" "Kinsaku Times" "Nagasaki Press" など、改題して、數年前まで續刊してゐた。

此外、二流三流の外字新聞を數へれば、まだ四五十種以上もある。而してこれらの外字新聞の發行者や編輯者は、大部分が自由主義リベラリストか合理論者ラショナルリストばかりであつた。此事も、亦、彼等が作成した記事の史料的價値を、更に高からしめる一つの重要な要素であると私は考へるのである。